おはなしのくに

アラジンとまほうのランプ

アラビアン・ナイト

イラスト　鯰江光二

むかしむかし、ある町に、アラジンという
まずしい青年がいた。
ある日、遠い国の悪いまほう使いが
やってきて、アラジンに言った。
「アラジン。じつは、お前はえらばれた
人間で、大切なやくめがある」

まほう使いは、アラジンを
町のはずれまで
つれてゆくと、
じゅもんを
となえはじめた。
すると、急に地面が
グラグラゆれ出し、
…足元に、
大きなあながあいた。

「あなのおくにある
ランプをとってくるのだ」
まほう使いは、
アラジンの指に指わをはめた。
「これがお前のお守りだ」

アラジンは、まほう使いをしんじて、
深いあなに向かって歩き出した。

あなのおくは、
ずっと下まで
かいだんが
つづいていた。
そこには美しい
庭園があって、
…古ぼけた
ランプがあった。

「これだな」
アラジンは
ランプを大切に
しまいこんだ。

あなの入り口ではまほう使いが今か今かと待ちかまえていた。

「アラジン、よくやったぞ。早くそのランプをわたせ」

「外に出たらわたすよ。オレの手をひっぱっておくれよ」

まほう使いはげきどした。

「さてはランプをわたさないつもりだな？！」

そして、のろいをかけて

入り口をふさいでしまった。

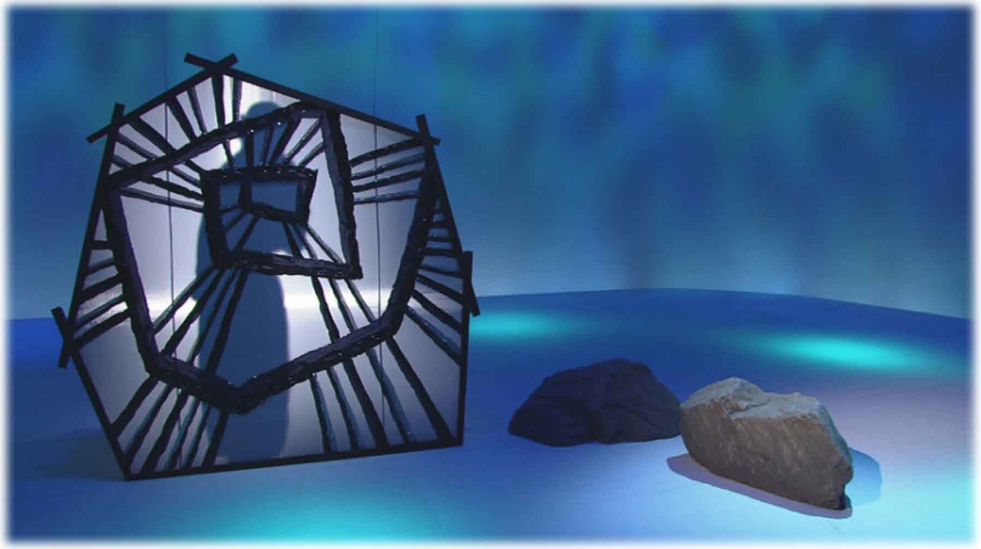
アラジンは、真っ暗やみに取りのこされ、
なすすべもなく、三日がすぎた。
アラジンは思わず、
いのるように手を合わせた。

すると…目の前にとつぜん大きなま人が
あらわれた。
「お前は一体何者だ？！」

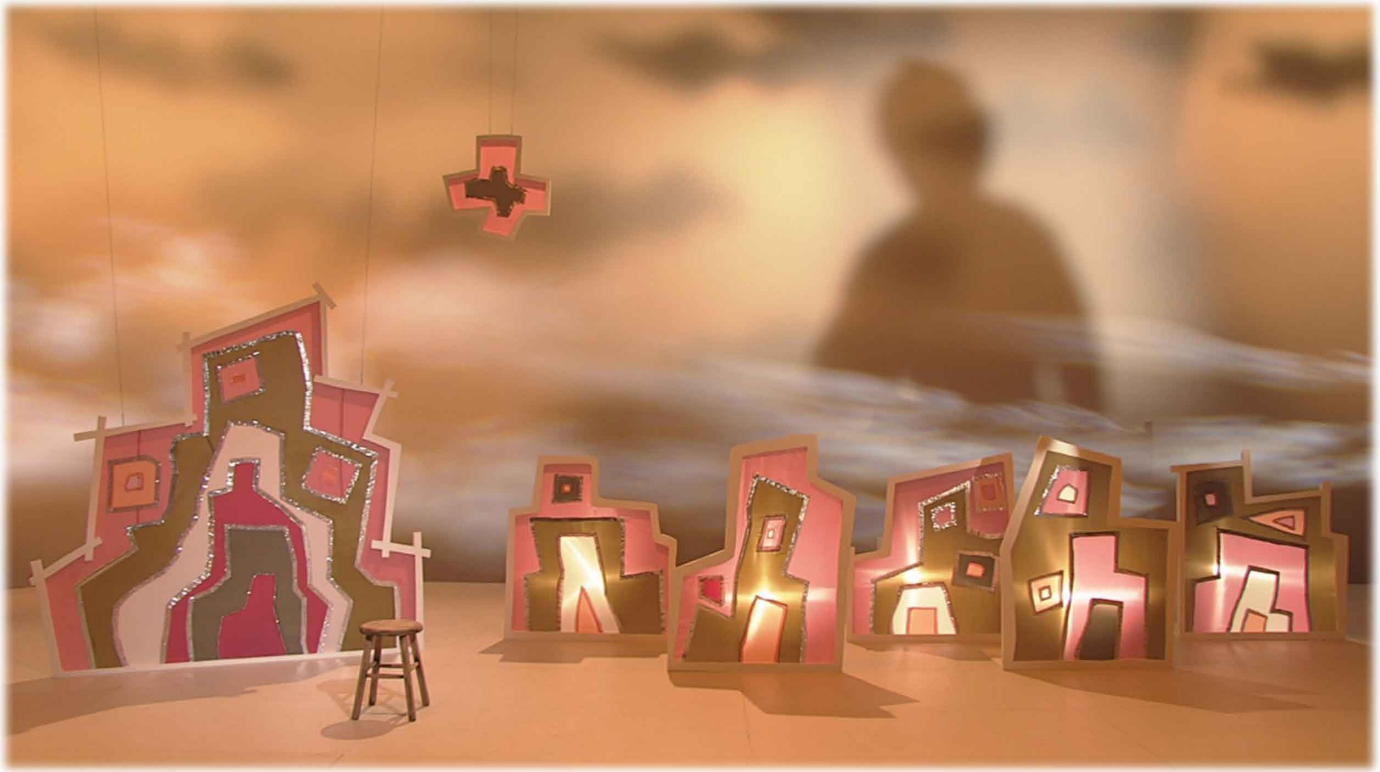
「ご主人様、あなたののぞみは
何でもかなえます」
「じゃあまず、オレを
ここから外へ出してくれ」

「かしこまりました」

と、つぎのしゅん間…アラジンは
なんと、元の場所に立っていた。



アラジンは家に帰った。ところが
家には、食べるものがなかった。
そこでアラジンは、ランプを売ることに
して、きれいにみがき始めた。すると…



「ご主人様。
なにかご用で
しょうか？」
指わのま人より、
何倍も大きな
ま人だった。

ランプのま人は、アラジンのねがいを
かたっぱしからかなえてくれた。
「食べものを持ってこい！」
「かしこまりました」
アラジンは三日かけて平らげた。
そして次に…

「ほうせきを
金のはち４０こに入れて
４０人の男に持たせ、
４０人の女につきそわせろ」
「かしこまりました」

アラジンは行列をひきいて
きゅうでんに行き、
おひめ様とのけっこんを
申しこんでみとめてもらった。

アラジンとおきさきは、
新しいきゅうでんをたて、
幸せにくらした。
めでたしめでたし、…とはならなかった。

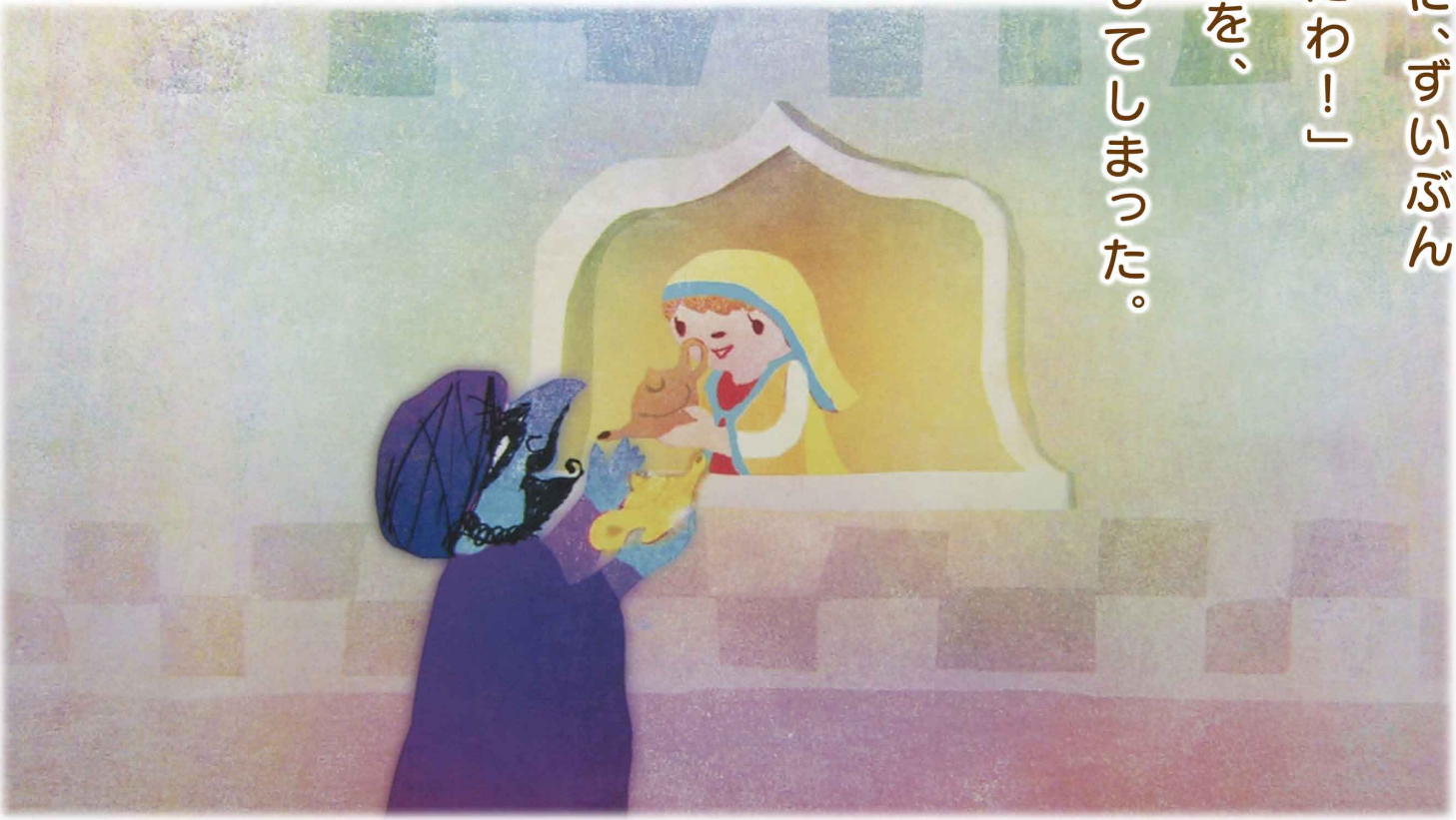
ある日のこと。町に、みょうな男があらわれた。

「古いランプと新しいランプ、
ただで取りかえますよ～」

きゅうでんでは、おきさきがるす番をしていた。

「そうだ、おっとの部屋に、ずいぶん
古ぼけたランプがあったわ！」

おきさきは、古いランプを、
新しいランプと交かんしてしまった。



もちろん、それは、
アラジンの大切なまほうのランプだった。
そして、そのみょうな男は、その昔、
アラジンを地下にとじこめた、
あのまほう使いだった。

「ご主人様、何かご用ですか？」
「えへん、アラジンのきゅうでんとおきさきを、
わたしの国まで運び去っておくれ」
「かしこまりました」
きゅうでんは、おきさきもろとも、
いっしゅんにして消えてしまった。

アラジンは悲しみにくれた。
「ああ、ランプさえあれば…」
アラジンは思わず手を合わせていのった。
すると…

「ご主人様、何かご用ですか？」
指わのま人だった。
「おお、お前のことをすっかり
わすれていたよ」
「どうぞご命令を」
「それじゃあ、わたしのつまがいる所まで
つれて行っておくれ」
「かしこまりました」

きゅうでんは、遠くはなれたまほう使いのくにに
あった。まほう使いは、いつもランプを
ふところに入れていた。そして毎日おきさきに
けっこんを申しこんでは、まるで相手に
されずにいた。そこでアラジンは、
おきさきとあることをたくらんだ。

あるばん、おきさきは、
にこにこしながら
まほう使いにお酒を飲ませた。
まほう使いは、
いい気分でよっぱらい…
かんぜんにねむってしまった。
お酒の中に、
薬をしこんでおいたのだ。

アラジンは、まほう使いのふところから、
ランプを取り出した。
そして、けんでひとさしして、
まほう使いの息の根を止めた。

「ご主人さま、
何かご用ですか？」
「ああ。きゅうでんと、
つまとわたしを、
元通りの場所まで
つれて行ってくれ」
「かしこまりました」

こうしてアラジンは、ふたたび、おきさきと
幸せにくらした。
今度こそ、めでたし、めでたし。